

死ぬのをやめて、生きる決めた。

みんな死ねばいいと本気で思っていた。中学二年生の秋、不登校になった。死んでしまいたいと思っていた。狭い学校という閉ざされた世界で、私はうまく人間関係を築けなかった。自分ではない誰かに決められた生活が合わなかった。

朝になると、家族は仕事や学校へ行く。明日が怖くて眠れなかった。私には待っていてくれる人も場所もない。不自由で独りぼっち。遠い海の向こうになら、私の居場所はある？ 自由はある？ 想いを馳せた。

「マジでアメリカ、私の中学に原爆落としてくれ。私をいじめて笑ってるアイツらを、問題児扱いするクソ教師を、全員殺してくれ。」

私も殺してくれ。ベットの中で泣きながら毎日願っていた。私は自殺をする勇気がなかった。怒られたり、迷惑をかけることが怖かった。

「人助けして死ねば怒られないんじゃないか？」

カンボジアのニュースを見て思った。次に死にたくなったら、地雷を撤去するふりして踏んで、死んでやろう。そうすれば怒られずに死ねる。そう思うと、息がしやすくなった。そして考えた。

「明日死ぬならあなたは今日、何がしたい？」

あんなに恐ろしいことを願っていた私は、不登校に関わる活動を始めた。十九歳で不登校の子ども達に関わるNPO団体に所属し、もう三年。きっかけは覚えていない。ただ、明日死ぬなら私は最後まで、不登校の子どもと過ごしたい。

死ぬ前に行きたかったヨーロッパにも行った。オランダにあるハーグの国際裁判所、アンネ・フランクの隠れ家、ポーランドにあるアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所。一人で旅をした。ナチスは子どもや、障がい者など労働力にならない人から殺した。多くの人の命を奪ったガス室。地下に作られたそこに入ると、身震いするほどの寒気を感じた。狭い部屋の中で、誰かが啜り泣く声が響いていた。ここで命を奪われた人達が最後に見た景色を見た。

アンネ・フランクは、十六歳で死んだ。私に関わる子どもに同じ歳の子がいる。

今の日本に、ヒトラーはいない。なのに家から、部屋から出られない子どもが大勢いる。明日が来ることに怯える子どもがいる。学びたくても学べない子がいる。その何が平和だ。くそくらえ。

ヨーロッパの旅で、私は三つ決めた。生きたかった全ての人の分まで人生を楽しむこと。二度とこんなことが起きないように行動すること。世界中の子どもが大声で笑えるよう力を尽くすこと。オスカー・シンドラのような、掴んだ手を離さない人間に私はなりたい。

死ぬのをやめて、昔死のうと思っていたカンボジアへ行きたくなった。カンボジアに行く時は、地雷

を踏みに行くのだと思っていた。地雷を踏むわけにいかなくなったので、小学校の壁のペンキ塗りをしようと考えた。

同時にカンボジアの内戦について学んだ。プノンペンにあるキリング・フィールドやトゥールスレン拷問博物館、シェムリアップの地雷博物館を訪れた。

地雷博物館では本物の地雷を見た。現在カンボジアでは地雷の除去をするには政府の許可が必要だ。また除去方法に国際ルールがある。私は心の中で、(地雷を踏むと国際問題規模で迷惑かかるし、めっちゃ怒られるじゃん)と過去の自分の無知を笑った。

拷問博物館には、第一発見者が目にしたおぞましい光景が残っていた。拷問途中の人間がベットに縛り付けられている写真からは、血の匂いと呻き声がした。爪が剥がれた写真を見て、思わず自分の手を爪が隠れるように握った。拷問に使われたベットと足枷は、そのままそこにあった。同じような部屋がいくつも並ぶここは元々高校だった。私は耐えられず建物を出た。

この世界は正直言って腐ってる。

なのに子どもは希望に満ち溢れている。小学校から子どもの笑い声が聞こえる。私は仲良くなった子に、日本語の名札を作った。一人にだけのつもりで作ると、瞬く間に子どもが集まってきて、一斉に自分の名前を言った。

「ម៉ា！」

「マ？ムア？ミャ？」

クメール語の名前に耳を澄ませ、最も近いカタカナを探した。ほぼ壁のペンキ塗りをせず、百人以上の子どもの名札を作った。付箋に書いただけの名札を、宝物のように握りしめていた。価値ってなんだ。幸せって、平和ってなんだ。

少年兵たちは十歳で自分の背丈と同じ銃を握った。私に関わる子どもに同じ歳の子がいる。

子どもは握れと言ったら銃でも、ペンでも握る。その素直さ、純粹さが尊い。子ども達は、希望だ。大人が、教育者が何を握らせるかが“教育”だ。だからこそ、私が教育に関わっていいのか？とたまに不安になる。

旅をして、不安は軽くなった。人生の大半を、木材丸さらしの床で過ごす彼女と出会った。重度の身体障がいをもっていた。この国では“障がい”への理解がない。人と違えば悪魔に取り憑かれた子、と多くの子が殺される。

家とは呼べない壁のない小屋。かろうじてある屋根は、隙間から空が見える。彼女の母は、遠い国から来た私を歓迎してくれた。横になっている彼女の隣、縁側のようなところに座った。彼女が横になり、私が座る場所は日光が全く遮られていない。カエルの鳴き声が聞こえる。彼らはここを住居とし暮らしている。カンボジアの農村部で、彼女は生きている。

「クニヨム、チョモツホ、マリナ！クニヨム、モパイピーチュナム」

と拙いクメール語で伝えると

「ដូចគ្នា！」

娘と同じくらいの歳だ！とお母さんが笑った。狭く不自由な世界に抗って、懸命に生きている彼女が一四歳の私と重なって見えた。

いつも子ども達と過ごすように、一緒にお菓子を食べた。背中をさすり、手を握り、名前を呼んだ。他の子が井戸水を汲むのに苦戦している姿を見て笑った。

別れ際、お母さんが私を抱きしめて、頬を撫でてくれた。クメール語だったが

「来てくれてありがとう」

と言われた気がした。抱きしめられた時、昔不登校の保護者に言ってもらった言葉を思い出した。

「あなたが生きていてくれて嬉しい。出会えて嬉しい。笑って、楽しそうにしていると、自分の子にもそんな未来が待っていると思えるから。」

この言葉を、やっと真っ直ぐ受け取れた。何を大袈裟なこと言ってんだ？とずっと受け取れてなかった。

「私、生きていていいんだ。」

生まれて初めてそう思った。何もできなくて、口が悪くて性格歪んでても、ここにいていいんだ。私も誰かの力になれるんだ。カンボジアの旅を経て、私の心は晴れ晴れしていた。

相変わらずムカつくことは多いけど、この世界はまだ捨てたもんじゃない。やっとそう思える。大きな声で原爆に反対しよう。自殺に、人殺しに、戦争に反対しよう。

ヨーロッパの旅で、死ぬのをやめた。カンボジアの旅で、生きると決めた。

2024年、私は年間のべ1,387人の子どもと関わった。2025年はのべ11,935人に会える予定だ。そのひとりひとりに平和の大切さを伝えている。そしてその手に人を殺す武器ではなく、学びを私は届けたい。

そんな思いから非営利団体『kimyo-na-manul』を立ち上げた。不登校経験者や発達障がいグレーゾーンの奇妙な奴らがメンバーだ。互いを理解し合うことで差別や偏見のない社会を作る。だから私は不登校だったと積極的に話す。不登校への偏見をなくしたい。共に知り、学ぼうじゃないか。学びは出会いだ。出会いは学びだ。

平日は不登校の子ども達と過ごし、土日は社会に抗う仲間達と過ごす。夜中に通信制大学の勉強をする。私はまだまだ成長しなくてはならない。

平和をテーマにしたイベントの実行委員をやるのもそうだ。

「マックやスタバはイスラエル支援企業だから、食べちゃダメだよ。」

「じゃあハンバーガーを食べたい時はどうしたらいいの？」

「作っている会社を調べるんだよ。」

という小学生の会話を、去年の同イベントで聞いた。知らなかった世界に出会い、そこから学び考えていた。出会い、学び、知り、考える。それが平和を育てるのだと実感した。

ダイアナ妃は、抱きしめるだけでエイズ患者への偏見を無くした。きっとこれがただの女性では、あそこまでの力はなかっただろう。だから私は『ミズエシカリンクジャパン』というコンテストに出る。ミスコンというと、華やかな世界をイメージするかもしれない。実際は“美”の力で社会を変える。それがミスコンの目的で、グランプリに求められる役目だ。

あなたに仲間になって欲しい。旅を経て言われるようになった。大阪万博に誘われた。シグネチャーパビリオンいのちの遊び場クラゲ館の仲間で、未来の学びを考える。

旅に出るまで私は狭い視野で、辛いことや悲しいことばかり見ていた。出来ないこと、持っていないものばかり数えていた。広い世界を見て悲しみの中にある幸せや、私が持っていたものに気がつくことができた。

「もっと早くあなたと出会いたかった。なんで早く会いにきてくれなかったの。」

ある子どもの言葉。私は、私しか持っていないものを持っている。そんな私を待っている人達がいる。だから生きて一人でも多く出会わなければならない。

ヒーローと呼ばれる人達は多くの人と出会った。出会った人達のために、ただ誰かのために行動し続けた。それを人は“平和貢献”とよぶ。個々の小さな平和がやがて、大きな平和をつくる。彼らのように私もなれるだろうか。誰かのために必死になる人生をおくりたい。

旅の本質も遠くへ行くことではなく、学ぶこと、出会うことだ。私の人生に、旅は不可欠だ。十四歳の時とは違う。ベットの中で、世界の滅亡を願って泣くのはもうやめた。私には行動制限も、足枷もないのだからどこまでもゆける。死にたい誰かを、一緒に生きよう、と抱きしめたい。

平和な世界をみんなで、私は生きたい。